

氏 名	中 尾 喜 代 子 なか お き よ こ
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 記 番 号	論 医 博 第 423 号
学位授与の日付	昭 和 43 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	ニホンザルの肺臓のリンパ組織に関する研究

論文調査委員 (主査) 教 授 堀井 五十雄 教 授 西村 秀雄 教 授 岡本 道雄

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は鹿児島県屋久島で捕獲したニホンザル10例を犬山モンキーセンターで管理し全例健康でツベルクリン反応陰性のもののみを使用して、その全肺葉につき顕微鏡的検査を行ない、肺臓内のリンパ組織の性状及び分布、特に気管、血管及び胸膜との関係を詳細に検索し、その結果を統計的に整理して報告した。即ち肺臓内に出現するリンパ組織につき知り得たところを整理統合すれば次の様になる。

ニホンザルにおける肺臓のリンパ組織は気道壁、血管壁及び胸膜下にだけ出現し、他の部分には認められない。又肺臓のリンパ組織はリンパ小節又は、リンパ浸潤の形をとっている。

1. 気道壁リンパ組織は肺臓内全リンパ組織中最も多く 63.3 %を占めていて、個体及び各肺葉間に出現率の差を認めない。葉気管支より呼吸気管支梢までの気道壁に出現し、主に気管支の分岐部 (79.8%) の固有板層中に出現する。(62%) その出現率は大きな気管支の分岐部程高く末梢程低くなる (葉気管支 11.4%終末気管支梢 16.4 %) しかし出現リンパ組織実数は中気管支壁に最も多い。(30.5%) リンパ組織の大きさは葉気管支壁のものが最も大きく、末梢程小さい。又小気管支壁より終末気管支梢にかけて二次小節を有するものを少数認める。又気管支壁リンパ組織中 13.2 %に明中心を認めるがこれは気道の間部即ち気管支壁より終末気管支梢壁までのリンパ組織に認める。

2. 血管壁リンパ組織は気道壁リンパ組織より少なく胸膜下リンパ組織より遥に多い。個体差が多いが平均すると全リンパ数の 32.2 %を占める。肺葉により大差はない。肺動脈壁並びに肺静脈壁に出現するが肺静脈壁リンパ組織の方が肺動脈壁リンパ組織より遥に多い。(90.6%) 気管支壁リンパ組織同様主に血管の分岐部に出現する。(肺動脈壁分岐部リンパ組織 91.1 % 肺静脈壁分岐部リンパ組織 93.1 %) 肺静脈壁リンパ組織は血管内径 0.23 mm— 0.12 mmの細い部分に多く肺動脈壁リンパ組織はそれより太い血管内径 0.51 mm— 0.40 mmの肺動脈壁に多い。血管壁リンパ組織の大きさは気道壁リンパ組織より非常に小さいが肺動脈壁リンパ組織と肺静脈壁リンパ組織の大きさには差はみられない。又血管壁リンパ組織は主に血管の外膜に出現し明中心を認めない。

気管支動静脈壁にはリンパ組織は全く出現しない。

3. 胸膜下リンパ組織は3リンパ組織中最も小さく、数も少ない。即ち全リンパ組織の4.5%を占めるにすぎない。胸膜下結合組織と肺小葉間結合組織の交叉部に限って現われる。個体及び肺葉間に出現率の大差を認めない。明中心も認めない。

論文審査の結果の要旨

各種器官におけるリンパ組織の発生と分布の問題は、とくに最近の免疫生物学の進展、抗体生成とリンパ球、リンパ組織の関与の問題などとも関連して、被検動物の選択にじゅうぶんの意を用いない研究はほとんど無意味であるといっても過言ではなく、じゅうらいの研究成績のうちでも再検討を要するもの少ないとしない。

著者はその点にかんがみ、材料の選択には最も意を用いた。すなわち屋久島で捕獲され、犬山モンキーセンターで管理され、全例健康でツベルクリン反応陰性と同センターで保証されたニホンザル10例について、その全肺の連続切片を作製、肺内リンパ組織の質および量を検索した。

1) 肺内リンパ組織は気道壁粘膜上皮下リンパ組織、血管リンパ組織、胸膜下リンパ組織の3種で、その出現比率は63.3%:32.2%:4.5%である。

2) 気管支壁リンパ組織は肺内リンパ組織の主力を占めるものであるが、個体差および肺葉間の出現率の差はないが、大きな気管支樹の分岐部に出現する傾向が強く、その13%に明中心を有する二次小節の出現を認める。

3) 血管系リンパ組織は肺動、静脈枝の外膜位に出現し、気管支動静脈系には全く現われない。出現について個体差はやや著しいが、肺葉間出現率には大差はない。動、静脈間では肺静脈枝の方にはるかに多く出現し、しかもその分岐部に多い。明中心を有する二次小節の出現はない。

3) 胸膜下リンパ組織は全リンパ組織中最も少なく、かつ小形であり、明中心を認めない。出現部位は胸膜下結合組織と小葉間結合組織の交叉部に限られている。

要するに本研究はその材料の質および量、検索方法およびその処理の周到な点からみて、この方面の研究のStandard workとみるべきものであり、医学博士の学位論文として価値あるものと認める。